

# 人の移動と国際文化 —ポスト3・11における「故郷」の意味とのかかわりで—

## Migration and Intercultural Studies: With a Focus of the Meaning of “Home” after 3・11

山 脇 千賀子\*  
Chikako YAMAWAKI

### はじめに

2011年3月11日の東日本大震災・大津波とそれに引き続く福島原発事故によって、故郷から強制的に移動させられた人々が、今日日本中に散らばって生活している。人によっては、日本を後にして外国に移り住んでいる場合もあるだろう。そうしたニュースを通して伝えられる「失われた故郷」への想いは、被災者のみならず多くの人々の胸を打つ。

しかし、敢えて問う。「故郷」とは何だろうか。生まれ育った土地という定義が最も一般的な解釈であろうが、それ以外の根拠によって特定の土地に愛着をもつ人々がそこを「故郷」と呼ぶことも決して少なくない。つまり、私たちは自らと深く結びついた場所 (Place) や場 (topos) を「故郷」と呼んでいるようなのだ。

そのようなものとしての「故郷」は、私たちの生活や生き方とどのように関係しているのだろうか。日頃から「故郷」との深い結びつきの中で生活している人にとって、そんな問いが発せられるのは「異常事態」である。多くの場合、「故郷」が失われてしまった状態になって、初めて意識される問いであろう。私にとっての「故郷」の意味が問われるのは、「故郷」の外においてであって、「故郷」の中にある場合には、そのように私と「故郷」を分けて考えることさえナンセンスといえるからである。

3・11を経験した後、家や家族などを失って生き方を変えざるを得ないという状況に陥った人々のみならず、状況的には3・11以前と同じ生活ができる条件のもとにいる人々の間でも「生き方を変えざるを得ない」という意識をもつようになったという声がいたるところで聞かれるようになった。主に原発事故との関わりで発せられて、実際に、首都圏で生活していた人が西日本や海外に生活の拠点を移してしまったというケースも少なくない。移した拠点がもともとの生まれ故郷であるという場合もあるし、そうでない場合もある。いずれにしろ、ここで問題にしたいのは、実際に生活拠点を移すかどうかという問題とは少しずれたところで、私たちの「故郷」との関係性が変化したことが、この問題と関わっているのではないかということである。つまり、私たちは「故郷」を選ぶことを強いられているようなのだ。それも「自己責任」の名のもとにおいて。

こうした文脈において、本稿では、「故郷」と人々の生活・生き方との関係性を、特に近代国家体制のもとでの人の移動に関わる議論から考えたい。ポスト3・11の事例を扱うわけではないが、ポスト3・11を生きる私たちにとっての「故郷」を問う試みとして、である。

\* 文教大学国際学部准教授

## 1. 移民と植民地と戦争と一「外地」で生活した日本人の両義性

近代日本国家成立以降の日本と海外の間での人の移動を歴史的に辿ってみると、日本が欧米列強への従属を帝国建設によって免れようとしたのだという事実が、眼前に迫ってくるように感じられる。欧米の黒船によって鎖国体制を破られ、グローバルな政治・経済体制に組み込まれることになった日本の第二次世界大戦における敗戦にいたるまでのプロセスにおいて、どのように日本人は世界を移動してきたのかを大まかにみてみよう。

人の移動というと、移民の歴史という発想が一般的で、移民を語るときには早くも1868（明治元年）年にハワイ・グアムへの「元年者」が移民の嚆矢となったことがとりあげられることが多い。第二次世界大戦以前はもちろんのこと、敗戦以降も1970年代初期までは、日本は余剰労働人口を抱えたアジアの一国として、世界各地にむけて契約労働者・開拓者を輩出する移民送出国だった歴史がある。特に戦前期（1868～1941年）には、主な移民先である米国へだけでも約34万人の日本人が渡航し、ラテンアメリカ諸国への約25万人にプラスして、その他の日本植民地および勢力圏に含まれなかった地域への移民もあわせると約71万人が在外日本人となっていた（キクムラ＝ヤノ編 2002：107）。

米国を初めとしたアメリカ大陸における日本人移民たちの多くは、移民先の白人至上主義的社会において過酷な人種・民族差別を体験したことは、これまでの多くの記録や証言および研究によって知られている<sup>1)</sup>。特に米国と日本の間で太平洋戦争が勃発した後は、日本人移民一世のみならず移民先国で生まれ育った二世までもが、適性国民として強制収容所へ収容される等、著しい日本人排斥政策の下で生きることを強いられた<sup>2)</sup>。

しかし、こうした移民とは区別されるかたちで、明治以降の日本帝国がアジア・太平洋地域に獲得した植民地と勢力圏に「進出」した日本人は、さらに大規模なものである。敗戦時におけるこれらの地域の日本人人口は、朝鮮に75万3,000人、台湾に38万5,000人、樺太に40万人、南洋に7万人、満州に155万人、中国の勢力圏に49万7,000人を数えた（キクムラ＝ヤノ編 2002：107）。こうした「外地」の日本人は、アメリカ大陸における日本人移民が経験した人種・民族差別を、ちょうど逆の方向性において実践したといえるかもしれない。「日本人至上主義」的心性のもとで生きた・生きざるを得なかった人々ということができるだろうか。

以上のような現在の日本領土以外のいわゆる「外地」に居住していた民間人を合計すると約436万人にのぼり、これだけで敗戦時の日本内地総人口（推計約7,200万人）の約6%を占める。それだけの数の民間の日本人が、生活の場を日本列島から離れた「異文化」のもとに生きていたのである。これらの移民は、必ずしも最初に移民した場所に留まったわけではなく、転住を繰り返したケースも少なくないし、故郷との間を何度か往復したケースもある。このような実際に肌身を通じた「異文化接触」にさらされていた戦前までの日本人の規模を、ここでは確認しておこう。そして、こうした人々

1 たとえば、米国の例で、特に第二次世界大戦中の日本人に対する人種差別の実態を分析した研究としてはダニエルズ（1997）が簡潔に歴史的流れを解説している。また、ダワー（1986＝1987）においては、太平洋戦争にみられた米国側からの人種偏見に満ちた日本人観、および日本人の民族的優越性思想に基づいた政策が詳述されている。人種主義モデルによる世界理解の仕方としては、米国と日本の間には通常考えられているよりも大きな共通性または共犯性があることを示唆していて興味深い。同テーマに関する最近の研究としては、Azuma（2005）において、アメリカの日系人をめぐって二つの帝国主義の間におかれた意味が論じられている。

2 米国・カナダにおける日本人移民・日系人の強制収容およびその戦後補償運動に関しては、多様な研究業績が蓄積されている（移民研究会編 2008：48－58）。ペルーで日本人移民として成功していた男性が、第二次大戦下における米国政府とペルー政府の間での協働によって、米国の強制収容所に強制連行されて味わった波乱万丈の人生の聞き書きとしては（東出 1992）がある。

の間で「故郷」はどのように位置づけられていたのか、想像を働かせてみてほしい。もちろん、そこには多様な「故郷」があり、さまざまな「故郷」との関係性があったに違いない。なかには、移動した先において家族をつくり、「故郷」を創った人々もいるだろう。

上記の民間人とは別に、大日本帝国軍に関わり日本を離れて生きざるを得なかった軍人・軍属の人々の数は、さらに膨大なものになる。1945年8月ポツダム宣言受託による日本帝国の崩壊にともない、すべての植民地と勢力圏から復員および引揚げによって日本への帰国をした約688万人のうち、約367万人が戦地からの軍人・軍属からの復員であった（蘭 2009：17）。もっとも、ここには引揚げる事が叶わずに亡くなった人々や残留した人々は含まれて居ない。第二次世界大戦中に日本本土以外の地で亡くなった軍人・軍属は、推計164万人とされる（ダワー1987：356）。さらに、戦中に国外で従軍した経験をもつ人々の数は膨大なものになるが、それだけの規模の日本人が故郷を離れて生き、その間に様々な意味での「異文化接触」にさらされたはずである。それらの「異文化接触」のなかには、生死を左右するかもしれない危機的な状況もあっただろうし、あたたかな人間同士のふれあいもあっただろう。自国の軍隊のなかで行動が制限されていたとはいえ、否が応にも日本の外の空気に触れることになったのだ。つまり、日本の外から「故郷」をみる機会を持った人々なのだ<sup>3)</sup>。

民間人と軍人・軍属を合わせて敗戦当時、日本人の1割以上の人々が日本の外から「故郷」をみる機会を持った。これらの人々と同じ町村に住んできた隣人や知人・友人にも、間接的に「外の空気」はもたらされたであろう。例えば、日本の一般家庭で餃子や野菜炒めをはじめとした中華料理が家庭料理として食卓に上がるようになったのは戦後だといわれている（石毛 1982：146-151）。それは、上述した多くの引揚者がもたらした文化変容の一つであろうが、そのことを意識している現代日本人は少ない。アジアにおける日本帝国の侵略戦争にかかわる記憶は、戦後日本において著しく抑圧されている。

このように第二次世界大戦までの日本人が世界において移動をしていく過程において持っていた両義性は、その後の日本人にどのように受けつがれたのだろうか。アメリカ大陸に移民した日本人の多くは、欧米文化に深く根付いていたアジア人に対する蔑視・偏見のもとで社会の最下層に位置づけられ、サバルタンとしての生活から始めなければならなかった。他方の、アジア・太平洋地域に「進出した」日本人たちの多くは、富国強兵政策に基づいて急速に発展した日本帝国の威信を背景にして、現地の人々をサバルタンとして抑圧することが当然である、という前提のもとで生活を始めた。このような抑圧される立場と抑圧する立場が、同時進行的に世界における日本人の間でみられたということの意味を、戦後の私たちは十分に消化しているだろうか。

## 2. 沖縄というトポス—移動性のなかの人々の居場所

戦後日本において、上記の問いに真摯に向かい合わざるをえない経験をしてきたのは、ウチナンチュ（沖縄人）である。近代日本国家に強制的に組み込まれた後、沖縄は内地と呼ばれる日本と植民地に相当する外地との間で、まさに両義的な立場に立たされ続けてきた。さらに、戦後の米国占領期には、ウチナンチュが移民先であるハワイ・米国に定住していたために、沖縄在住のウチナンチュ

3 故郷を外から見る機会をもった人々として、もっと短期間のものとしては、日本本土を離れる観光旅行に出かけた人々も含まれる。日本が中国大陸において戦争を展開している間にも、盛んに「観光」が行われていたことの意味を再考する試みとして、（ルオフ 2010）がある。戦争を知らない世代にとっては意外のように思われるが、戦中には戦跡観光などのツアーが企画・実施されており、日本本土の外側から日本を見る機会をもつことがナショナリズムと深い関係にあることを示唆している。

ユとの間に、占領者・被占領者の関係性が埋め込まれる経験をしている（もっとも、表面的にはウチナンチュとしての水平的関係性が強調され、同時に「内地人」との差異が強調されることによって、米国の占領政策を正当化する戦略がとられた<sup>4)</sup>）。このように、ウチナンチュが被抑圧者であり抑圧者でもあるという引き裂かれた存在として立ち上げられる現場の背景には、ウチナンチュの移動の歴史が作用している。

沖縄は日本有数の移民送り出し県の一つであり、戦前・戦後を通じて（主に外国への）移民・（主に日本内地への）出稼ぎの送り出しが、県民にとって身近な生活の一部となってきた。近隣や親戚に移民・出稼ぎ経験者がいないウチナンチュはいないといってよいほどである。1879年の「琉球処分」によって日本国に沖縄県として組み込まれて以降、早くは1899年第1回ハワイ移民に始まり、その地理的条件もあってフィリピンを初めとした南方への移民が奨励されたほか、メキシコ・ペルー・ブラジルなどの新天地としての中南米諸国への移民も多数を占めた。第二次世界大戦までのウチナンチュ移民・出稼ぎ率は、総人口の20%を超えるものであったと推計される（榮野川 2011：191-2）。この比率は、現代世界において海外移民・出稼ぎを経済成長のための国策として位置づけているフィリピンを上回るものであり、人口の移動性が激しいことで知られるカリブ・中米諸国並みである。

ただし、日本国が最初から沖縄県からの出移民を奨励していたわけではない。沖縄県から外国に向けた移民が許可されるまでには、沖縄県人の標準日本語使用能力の低さや生活習慣の違いを根拠に、もしこうした沖縄県人を外国人の目にさらせば海外における日本人評価にマイナスの影響を及ぼす、という危惧が行政関係者のあいだでは普及していた（沖縄県教育委員会 1974：15-21）。こうした認識をもっていたのは行政関係者に限られず、移民斡旋を行っていた業者関係者や他府県からの移民の間でも、沖縄県人を「不完全な日本人」・「文明度の劣る人々」とみなす傾向があった。沖縄県からの移民は移民先において契約不履行のストライキを起こしたりするトラブルメーカーというレッテルが貼られて、実際にブラジルへの沖縄県からの移民は（呼び寄せ移民を除き）1912年からの4年間および1919年からの6年間にわたって日本政府が差し止めする処分をしている（屋比久 1987：48-50）。

こうした沖縄県人に対する評価は、日本国内の出稼ぎ先でも共通していた。主な出稼ぎ先だった大阪などの集住地域において沖縄県人に対する差別発言は日常化しており、関西地域における「沖縄人」をめぐる戦前期の社会・経済的事情を詳細に分析した富山（1990）によれば、「差別意識に基づいた集中的雇用」と「労働過程における差別的労務管理」により構成される「沖縄の労働市場」が形成されていた（富山 1990：122-132）。

上述した「内地人」によるウチナンチュへの差別意識・待遇は、第一次世界大戦後に日本の委任統治領となった南洋群島でも観察された。1922年にパラオ諸島に設置された南洋庁によって運営されたアンガウル燐鉍採鉍所における賃金体系は、1933年時点の日給で、日本人3.45円、沖縄人2.53円、支那人2.15円、チャモロ1.40円、カナカ0.76円といった「民族集団」の序列体系を示していた（富山 1993：57）。つまり、南洋においては日本人と現地人の中間的な立場にウチナンチュが置かれていたことが分かる。南洋の現地人があまりにも労働能率が悪いのに比較して、ウチナンチュの熱帯地方における精力的な労働ぶりが評価される一方で、日本人に比較すると現地人を「指導」していく資質には欠けると考えられていた（富山 1993：56-61）。

このように、近代日本国家に琉球王国が沖縄県として組み込まれて以降、ウチナンチュは故郷・

4 沖縄の米国占領期におけるハワイのウチナンチュが果たした役割および米国による沖縄統治政策に与えた影響については、(岡崎 2007, 2008) で詳しく論じられている。

沖縄を離れた日本「内地」・「外地」や外国の移民先において、「日本人でありながら日本人ではない」という両義的存在として扱われ続けてきたし、太平洋戦争中に地上戦を経験した沖縄ではそうした両義性に基づくウチナンチュに対するスパイ疑惑が多くの沖縄の人々の命を奪い、戦後の米国占領期においてもその両義性は存続してきた。

こうした両義性からウチナンチュを解放する戦略として立ち上げられたのが、日本を介在しないウチナンチュという主体の構築の試みとしての「世界ウチナンチュ大会」である。これまで見てきたようにウチナンチュは世界各地に根を下ろしており、濃密な血縁・地縁関係に媒介されたウチナンチュ・ネットワークは戦前・戦後を通じて活発に機能してきた<sup>5)</sup>。沖縄県は、1972年の「本土復帰」以降、海外同胞であるウチナンチュを県として支援することを求められるようになるが、1990年に開催される「世界ウチナンチュ大会」以前は、その他の移民送り出し県と際立って違う施策をとってきたわけではなかった<sup>6)</sup>。しかし、ひとり沖縄県だけが、世界に拡散した沖縄出身者とその子孫を対象にして、一同に「故郷・沖縄」に集まろうという異色なイベントの企画・実施を1990年以来ほぼ5年毎に行っている。2011年10月には第5回大会が開催されたばかりだ。

大会参加者は回を重ねるごとに増え続け、第5回大会には世界から5千人以上が参加して沖縄県を熱狂の渦に巻き込んだ。なかでも、那覇市の繁華街である国際通りを世界からの参加者が出身地の民族衣装などに身を包んで練り歩くパレードは圧巻である。ウチナンチュであることの誇りと移民先の社会での地位を築いてきた人々の誇りが同時に達成される瞬間といたらよいだろうか。

1990年の第1回大会の仕掛け人であり、以来大会の企画・運営に携わってきた知念英信さんは、第4回大会参加者に次のように感謝の言葉をかけられたという。「私どもは五年に一回、魂の栄養補給に、ウチナンチュ大会に来るのを楽しみにしているのです」(2011年7月3日開催日本国際文化学会第10回大会シンポジウム3「人の移動と国際文化」配布レジュメ)。

このコメントからは、祖先の故郷としての沖縄県に来ること以上に、「世界ウチナンチュ大会」に参加することが重要な意味をもっていることが読みとれる。つまり、世界からウチナンチュが国境を越えて集まってくることによって、そこに「故郷」としてのトポスが登場しているのではないだろうか。それは、沖縄県に行けばいつでも遭遇できるトポスというわけではないだろう。だからこそ、「世界ウチナンチュ大会」が「ユートピアとしての故郷」を創造／想像していることになる。

5 こうしたウチナンチュ・ネットワークがどのようなものだったのかを象徴的に示しているのが、戦後の沖縄救済運動である。日本の敗戦直後は、海外日系組織は息をひそめていたのだが、いち早くウチナンチュたちは東京と米国の間で甚大な戦災を被った「故郷・沖縄」についての情報交換をして、1945～46年にかけて世界の同胞に沖縄救済運動を呼びかけた。これに答えて沖縄救済のための組織が作られたのは、カナダ、ハワイ、メキシコ、ペルー、ボリビア、ブラジルであった(アルゼンチンでは既存の新聞社を中心に募金活動を行った)。これは、それぞれの地で、戦前からウチナンチュによる同郷者団体が活動をしており、そうした団体に関わった人々の間での連絡体制があったことを示している。さらに、この救済運動において興味深いのは、呼びかけた米国の組織を頂点にした垂直的な命令系統が築かれるわけではなく、それぞれの組織が国や地域が置かれた状況の中で自律的に活動を行ったことである。ウチナンチュであることが、まさにネットワーク的に機能したのだ。日系人の場合は、日本国家の出先機関である大使館・領事館を命令系統の頂点にした日系組織を作っていたので、この中央が戦争で排除されてしまうと、日系人間でのつながりも機能しなくなったのとは対照的だ。ペルーの事例を中心にした日系・沖縄系組織の分析に関しては、(山脇1999)を参照のこと。

6 1990年「世界ウチナンチュ大会」が企画された背景については、沖縄をめぐるアイデンティティ・ポリティクスとの関連で(新垣1998)(金城2008)において分析されている。1980年代に沖縄県の新聞社・テレビ局といったマスメディアで企画された世界で活躍するウチナンチュを紹介する記事・番組があったことや、沖縄県政における復帰後20周年を目前にした新たな沖縄振興策が求められるなかで「海洋民族」として自らを国際社会に位置づけることによって国際交流拠点としての発展を目指す方向性を見出したことなどが、上記論文において詳述されている。

### 3. 定住者と移動者のあいだーハイブリッドな「故郷」をめぐって

前述した知念さんによると、現在の沖縄在住のウチナーンチュの視点からは、十分に世界のウチナーンチュを取り巻く状況は見えていないという。それをみえるかたちにしたと考えて企画したのが第1回世界ウチナーンチュ大会だった。沖縄県内に定住している人には見えない「何か」が、移動先における生活を積み重ねてきたウチナーンチュには共有されているらしい。それは何なのだろうか。

定住者と移動者を対比させながら、人々が「社会」を形成しようとしたときに何をしているのかをその特徴別に分類してみたのが、下記の《表》である。

《 表 》 定住者と移動者の「社会」形成における諸特徴

	定住者	移動者
まとまりの契機	違いへの注目	同類への注目
社会の志向性	内部団結・分割への志向	外部と内部の架橋への志向
つくられるもの	テリトリー形成（なわばり）	ネットワーク形成（つながり）
メンタリティ	意識されない文化依存	地理的移動による救済

（出所：一部（中井1990）を参考に筆者作成）

《表》は対称性を明らかにするために定住者と移動者の単純化された特徴を取り上げているので、若干の説明をしたい。まず、どのような契機によって「社会」が形成される傾向があるのかをみてみよう。移動者がなんらかのまとまりを形成しようとするときに重点を置いているのは、なんらかの共通性を持つ者同士でつながろうとする意思である。それに対して、定住者がまとまりをつくるためにすることは、異質なものの排除であることが少なくない。ひとつのまとまりに所属するメンバーは同質であることが大前提とされていて、そこからはみ出すものは「社会」の一員として認められない。

そうしてつくられた「社会」は、定住者の間では内部の団結を強化することが目的となっていく。そのため外部との切り離し＝分割が「自然に」同時進行することになる。それに対して、移動者の間では様々な境界を越えて内部と外部を架橋するような活動が「社会」を支えるものとなる。こうした志向と対応するのだが、それぞれの「社会」がつくるのは、定住者の間では「なわばり」としてのテリトリーであって、移動者の間では「つながり」としてのネットワークである。

それぞれの「社会」に生きる人のメンタリティは、日常的に意識されることは多くないが、両者を対比することによって浮かび上がってくる。文化精神医学の視点から治療文化に関する考察をしている中井（1990）における議論を、筆者なりに本稿における枠組みに結び付けて解釈すると、定住者と移動者においては、決定的に心の支えとなるものが異なることが分かる。定住者においては、「故郷」であるテリトリーを取り巻く場所的・トポスの歴史・文化との関係性が人間存在を規定することになるため、テリトリーにおいて育まれてきた文化の枠組みの中でいかに生きるのが最重要課題となる。これに対して、移動者はネットワークのなかで自らの「故郷」となる場所やトポスを創ることを生きる証とするようなメンタリティをもった人々だといえるのではないだろうか。こうした移動者にとっての「故郷」には、国家や文化の境界を越えた人々が集うことになり、トランスナショナルな空気がもたらされるだろう。そのような「故郷」は、多様な背景や事情をもった人々が参加することのできるオープンな場所・トポスであり、ダイナミックに文化がぶつかり合いながら新しいハイブリッ

ドな文化を生み出す現場になるだろう。

以上のような定住者と移動者の対比から、世界のウチナンチュには見えていて定住者には見えていないものを分析するなら、上述した文化のダイナミズムということになるだろう。文化の捉え方として、定住者が過去から積み上げられた伝統を志向する傾向をもつとするならば、移動者は文化を未来志向のベクトルにおいて捉えようとする性向をもつ人々だということができるかもしれない。そうだとするならば、世界のウチナンチュが創るハイブリッドな「故郷」は、未来へのノスタルジーを可能にすることになる。定住者から移動者になることで一旦は失われた故郷と重ね合わせられながらも、ハイブリッドな「故郷」は未来に向かって開かれている。

### おわりに

社会学者のアーリの分析によれば、私たちの生活する現代社会は不可避免的に移動 (mobility) を前提としたものになっている (アーリ 2006=2000)。グローバリゼーションの進行とともに、船・鉄道・自動車・航空機などの人間の技術が生み出した乗り物によって、身体をもった人間が実際に頻繁に移動することが常態化している。毎日の通勤や通学だけでなく、仕事上の出張やレジャーとしての観光などが当たり前の生活の一部になっているし、世界のどこかで戦争が起り続けて国際的な軍隊やボランティアが国境を越えて活動することが止む気配はない。このような生身の人間の頻繁な移動を前提とする現代社会が、私たちに何をもたらしていることになるのか、今のところ十分に分析・考察が進んでいるとは言えないのが現状であろう。

定住者はテリトリー＝「故郷」を形成して、その中でこそ人間らしく生きることができると信じてきたが、この論理は今現在、どこまで有効なのだろうか。生活の場である社会自体が移動を含みこんでいることが明確になってしまうと、「故郷」は果てしなく拡散しているようにもみえる。そうした拡散によって、私たちは「故郷」からどんどん遠ざかるようであり、同時にごく身近にあまりにも簡単に「故郷」を創ることができる条件 (例えば、インターネット空間など) も現れてくる。

地球上の異なる地点で様々な要因によって「故郷」を奪われた人の悲痛な叫び声は、かつてよりずっと高い確率で、お互いに聞き取ることができる環境になってきている。叫び声を重ねあわせて「故郷」を創ることができる可能性も高まっているだろう。

しかし、現代社会が人々に贈り物として準備してくれたかにも見えるそうした環境は、実のところ「故郷」が奪われた人に対して、その責任はあなたにもあるのだ、という責めを負うことを要求している。ポスト3・11を生きる私たちの社会は、そのようなものとして私たちの眼前に立ち現れている。

**【謝辞】** 本稿は、筆者がコメンテーターの一人を務めた第10回日本国際文化学会シンポジウム3「人の移動と国際文化」(沖縄県名桜大学において開催)における司会・発表者・コメンテーター諸氏の議論に大いに触発されている。記して感謝申し上げます。

### 【文献】

新垣 誠, 1998, 「沖縄の心 (Uchinanchu Sprit) —ハワイにおける「ウチナンチュ」という主体性についての一考察」『移民研究年報』第4号: 20-40.

蘭 信三編, 2009, 『中国残留日本人という経験—「満州」と日本を問い続けて—』勉誠出版.

アーリ, ジョン, 2006, 『社会を越える社会学』法政大学出版会. (= John Urry, 2000, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the twenty-first century*, New York, Routledge.)

- Azuma, Ei'ichiro, 2005 *Between Two Empires: Race, History and Transnationalism in Japanese America*, Oxford University Press.
- 石毛直道, 1982, 『食事の文明論』中央公論社.
- 移民研究会編, 2008, 『日本の移民研究 動向と文献目録Ⅱ』明石書店.
- 榮野川敦, 2011, 「沖縄の移民—近代うちなーんちゅの移動の小史」陳天璽・小林知子編著『東アジアのディアスポラ』明石書店: 176-198.
- 岡崎宣勝, 2007, 「占領者と被占領者のはざまを生きる移民—アメリカの沖縄統治政策とハワイのオキナワ人」『移民研究年報』第13号: 3-22.
- 2008, 「戦後ハワイにおける「沖縄問題」の展開—米国の沖縄統治政策と沖縄移民の関係について—」『移民研究』第4号: 1-30.
- 沖縄県教育委員会編, 1974, 『沖縄県史第七巻』沖縄県教育委員会.
- 小熊英二, 1995, 『単一民族神話の起源』新曜社.
- キクムラ=ヤノ, アケミ編, 2002, 『アメリカ大陸日系人百科事典』明石書店.
- 金城宏幸, 2008, 「「世界ウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク (1) —沖縄社会へのインパクト」『移民研究』第4号: 83-96.
- ダワー, ジョン・W, 1987, 『人種偏見』(監修: 猿谷要) TBSブリタニカ. (= John W. Dower, 1986 *War Without Mercy*, New York, Pantheon Books.)
- ダニエルズ, ロジャー, 1997, 『罪なき囚人たち: 第二次大戦下の日系アメリカ人』南雲堂. (= Roger Daniels, 1993, *Prisoners Without Trial: Japanese Americans in World War II*, New York, Hill and Wang.)
- 富山一郎, 1990, 『近代日本社会と「沖縄人」—「日本人」になるということ』日本経済評論社.
- 富山一郎, 1993, 「ミクロネシアの「日本人」—沖縄からの南洋移民をめぐる—」歴史科学協議会編『歴史評論』第513号、校倉書房: 54-65.
- 中井久夫, 1990, 『治療文化論』岩波書店.
- 東出誓二, 1992, 『涙のアディオス』彩流社.
- ルオフ, ケネス, 2010, 『紀元二千六百年 消費と観光のナショナリズム』(木村剛久訳) 朝日新聞社.
- 屋比久孟清, 1987, 『ブラジル沖縄移民誌』在伯沖縄県人会.
- 山脇千賀子, 1999, 「人の移動・国家・生活の論理」清水透編『〈南〉から見た世界05 ラテンアメリカ』大月書店: 241-273.